

学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名

福岡県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	北九州市立大里東小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	2	0	17	28
児童数	99	90	87	93	92	78	0	539	

研究の概要

1. 研究主題

子どもの主体的な活動を通して、基礎・基本の確実な定着を図る学習指導法の研究

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 1, 2, 3, 4, 5, 6年生・算数
児童によって理解や習熟の程度に差が見られ、加配教員が入って日頃から少人数指導を行っている教科であるため。また、本校の主題研究として数年前から研究を積み重ねてきた教科であるため。
- ・ 5年生・国語
観点別からも見ても領域別からも見ても、言語に関する事項の知識や技能が不十分な学年であるため。それが原因で、自分の考えを自分の言葉で表現する力が不足しているため。
- ・ 5年生・社会
社会的事象についての知識や資料活用の技能が不十分な学年であるため。また、高学年では、3・4年生の社会科の学習をふまえ、社会的事象について自主的に考え判断する力を培う教育が重要になってくるため。
- ・ 6年生・理科
わたしたちを取り巻く自然環境や地球と宇宙に関する思考や知識が不十分な学年であるため。

(2) 年次ごとの計画

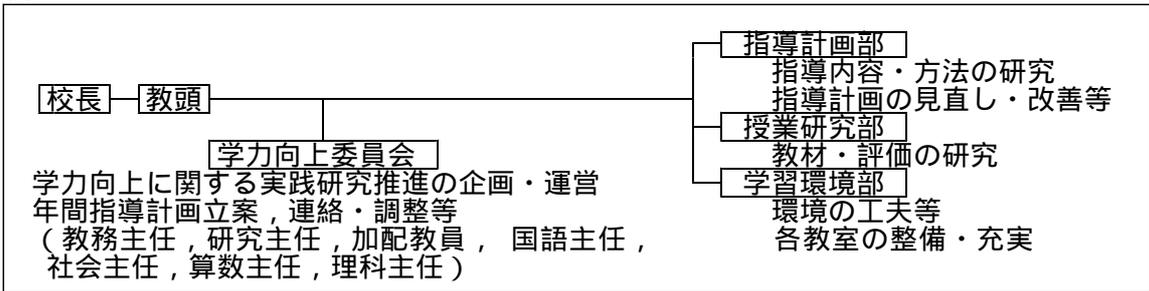
平成14年度	<p>テーマ 基礎・基本の創造を図る学習指導法の研究 研究の見通し 教材の内容や児童の実態に応じて、児童の主体的な活動を工夫したり、少人数指導やTT授業等個に応じたきめ細かな指導を行ったりするならば、児童は、既習の基礎・基本を基に新たな基礎・基本を創造的に作り出すことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各教科における学力の実態調査とそれに基づいた具体的方策の検討 ・ 各教科における単元の基礎・基本の明確化 ・ 教師の持ち味を生かしながら、個に応じたきめ細かな指導を行うための、教科担任制や交換授業、少人数指導等の多様な教授形態による授業の展開 ・ 授業において児童が基礎的・基本的な内容を身につけるための、主体的・問題解決的な活動の組織 ・ 評価規準の明確化とそれに基づく評価テストの作成及び活用
平成15年度	<p>テーマ 基礎・基本の補充・発展を図る学習指導法の研究 研究の見通し 理解や習熟の程度に応じた少人数指導を工夫したり、補充的・発展的な学習の教材を開発したり、指導に生かす評価を工夫したりする授業を行えば、児童は、学習した基礎・基本を活用したり、発展させたりすることができるであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 理解や習熟の程度に応じた少人数指導を工夫した授業の展開 ・ 授業において児童が基礎的・基本的な内容を身につけるための、主体的・問題解決的な活動の組織 ・ 補充的な学習や発展的な学習で使う教材の開発 ・ 授業の中で見取った児童のつまづきを指導に生かす評価の工夫 ・ 児童の学び方に関する基礎・基本と教師の教授技術に関する基礎・基本を記述したハンドブックの作成
	<p>テーマ 基礎・基本の確実な定着を図る学習指導法の研究</p>

研究の見通し
 習熟度別や課題別，学習スタイル別などの多様な少人数指導を行ったり，担任一人で同時に補充・発展が図れる教材や指導形態を工夫したり，情意面や思考面，学習集団に対する評価を指導に生かしたりするならば，基礎・基本の確実な定着が図れるであろう。

研究内容・方法

- 理解度・習熟度別や課題別，学習スタイル別など，多様な少人数指導を工夫した授業の展開
- 授業において児童が基礎的・基本的な内容を身に付けるための，主体的・問題解決的な活動の組織
- 学級担任一人で補充的な学習や発展的な学習を同時に行う指導形態の工夫
- 発展的な学習で補充と発展が共に図れる教材の開発
- 補充的な学習や発展的な学習の事例集の作成
- 関心・意欲・態度と思考・判断を評価する方法や学習集団に対する評価の工夫
- 児童の学び方に関する基礎・基本と教師の教授技術に関する基礎・基本を記述したハンドブックの検討と修正

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 単元終了後のテストから

授業を公開した単元の終了後に行った評価テストの結果を検討した。全般的に見て，ほとどの学年においても，数学的な考え方や表現・処理，知識・理解が身に付いている。したがって，思考面や技能面，知識面の学力の向上を図ることができたと考える。

単元終了後の評価テストの結果 (100点中)

学年	単元名	観 点	得 点	学年	単元名	観 点	得 点		
1 学年 99人	ひきざ ん(1)	表現・処 理	本校学年平均点	9 8	5 学年 92人	面積	数学的な	本校学年平均点	7 1
			期待点, 全国平均点	8 0			考え方	期待点, 全国平均点	8 0
2 学年 90人	たし算 とひき 算のひ っ算(2)	数学的な 考え方	本校学年平均点	8 6	6 学年 78人	体積	表現・処 理	本校学年平均点	8 6
			期待点, 全国平均点	8 2			知識・理 解	期待点, 全国平均点	8 0
		表現・処 理	本校学年平均点	9 1			数学的な 考え方	本校学年平均点	8 9
		期待点, 全国平均点	8 4	期待点, 全国平均点				8 0	
知識・理 解	本校学年平均点	8 0	表現・処 理	本校学年平均点	8 8				
	期待点, 全国平均点	8 4		期待点, 全国平均点	8 0				
3 学年 87人	大きな 数	表現・処 理	本校学年平均点	9 4	知識・理 解	本校学年平均点	9 4		
		期待点, 全国平均点	8 4	期待点, 全国平均点		8 0			
		知識・理 解	本校学年平均点	8 7		期待点, 全国平均点	8 7		
4 学年 93人	面積	数学的な 考え方	本校学年平均点	8 1	知識・理 解	本校学年平均点	8 7		
			期待点, 全国平均点	8 0		期待点, 全国平均点	8 0		
		表現・処 理	本校学年平均点	9 3		数学的な 考え方	本校学年平均点	9 4	
		期待点, 全国平均点	8 0	期待点, 全国平均点			9 0		
知識・理 解	本校学年平均点	9 4							
			期待点, 全国平均点	9 0					

は，本校平均点が全国平均点，期待点より高い場合を表している。

(2) 算数に関する意識調査から

本校児童の算数に関するイメージが年間を通してどのように変化したかについて，4月と12月に同じ調査を実施し両者を比較した。全般的に見て，ほとどの項目，どの学年においても，算数に関するイメージがポジティブに変容している。特に， の算数ができる， のわかるというセルフイメージが，ポジティブに大きく変容している。したがって，情意面の学力の向上を図ることができたと考える。

算数に関する児童の意識調査結果

上段 平成 15 年 4 月実施

下段 平成 15 年 12 月実施

	1 年生 N=95 N=101	2 年生 N=88 N=86	3 年生 N=88 N=85	4 年生 N=92 N=90	5 年生 N=94 N=90	6 年生 N=78 N=75
算数の勉強がとても楽しい。	6 0 % 6 6 %	7 7 % 7 9 %	3 9 % 7 3 %	4 6 % 5 1 %	2 8 % 4 1 %	2 7 % 4 0 %
算数は勉強すればもっとできる ようになると思う。	7 9 % 9 1 %	9 7 % 8 5 %	6 4 % 8 4 %	6 5 % 7 1 %	5 3 % 5 9 %	5 6 % 6 3 %
算数の勉強はとても役に立つ と思う。	7 8 % 8 1 %	9 2 % 8 6 %	7 0 % 8 8 %	7 3 % 8 0 %	7 0 % 7 3 %	7 3 % 8 0 %
算数がとてもできるようにな ってきた。	4 5 % 7 4 %	5 5 % 7 6 %	3 5 % 7 7 %	2 7 % 6 2 %	1 7 % 5 3 %	1 7 % 5 3 %
算数の勉強がたいへんよく分 かる。	3 8 % 6 2 %	3 9 % 6 7 %	2 5 % 7 1 %	1 4 % 5 3 %	1 6 % 3 7 %	3 % 4 5 %

は、12月が4月よりポジティブに変容している項目を表す。

質問紙は、それぞれ5つの項目において、「とても」「だいたい」「あまり」「ぜんぜん」の中から1つを選択するものである。表の%は、「とても」を選択した児童の割合を表している。

2. 今後の課題

確かな学力の向上を図るには、学校だけでなく、家庭・地域の教育が必要不可欠である。しかし、本校児童は、基本的な生活習慣や学習習慣が身に付いているとは言い難い面がある。また、どの学年も家庭における学習時間が少ない。学びの習慣化を図ることが必要である。本年度の補充的な学習は、表現・処理、知識・理解の内容の定着を図るものばかりだった。今後、意欲や考え方を育てる補充的な学習を研究する必要がある。

発展的な学習は、本来すべての児童に経験させたい内容である。今後、発展的な学習が児童によって補充にもなり発展にもなるといった発展教材を開発する必要がある。

本校は、5人の加配教員を各学年に配置しているため、日常的に少人数指導を行っているが、それは特殊なケースである。今後、学力向上の取組を広めるために、担任1人で補充・発展を複式学級のように行う授業を創造する必要がある。

学力等把握のための学校としての取組

国語科や社会科、算数科、理科における教研式観点別到達度学力調査(CRT)の実施(5月)

算数科の計算力と演算適応力に関する実態調査の実施(3月)

算数科に対する意識調査と少人数指導アンケートの実施(4月と3月)

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成14年6月27日に、学校関係者や保護者、地域の方々を対象に、本校で北九州市学力向上フロンティアスクール1年次実践交流会を実施した。

平成15年9月22日に、学校関係者や保護者、地域の方々を対象に、本校で福岡県・北九州市学力向上フロンティアスクール2年次実践交流会を実施した。

平成15年9月の下旬に、学校関係者や保護者、地域の方々を対象に、本校で福岡県・北九州市学力向上フロンティアスクール3年次実践交流会を実施する予定である。

現在、HPを作成して、そこに学力向上の取組を掲載している。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
- 13～18学級 19～24学級
- 25学級
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
- 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
- 生活 音楽 図画工作 家庭
- 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無